

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月14日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520654

研究課題名（和文） 日本中世の「外国人居留地」に関する比較史的研究

研究課題名（英文） The comparative study about settlements of foreigners in Medieval Japan

研究代表者

柳原 敏昭（YANAGIHARA TOSHIAKI）

東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：30230270

研究成果の概要（和文）：九州と中国地方には、トウボウと唐人町という中世の「外国人居留地」を示すと考えられる地名がのこっている。本研究では、これらの地名をめぐる研究史を整理し、問題の所在を明らかにした。その上で、現地調査を実施し、沖縄や東南アジアとの比較史的な観点を持ちつつ、これらの地名を残す地域の空間構成の特徴について考察した。あわせて中世港湾＝坊津についての史学史的な研究を行い、今後の研究の土台を提供した。

研究成果の概要（英文）：In Kyusyu (九州) and Chugoku (中国) area, we can see Toubou (唐坊) or Toujinmachi (唐人町), the name of a place which denotes a settlement of foreigners in medieval time. By this research, first, I considered the problems of former researches. And then I carried out fieldworks in various places. I also carried out a comparative study with Okinawa (沖縄) or Southeast Asia, especially focusing on regional space composition. Moreover, I investigated how Bounotsu (坊津), well known as an international trade port, would have been evaluated, for the development of future research.

交付決定額

（金額単位：円）

|        | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2010年度 | 1,000,000 | 300,000 | 1,300,000 |
| 2011年度 | 500,000   | 150,000 | 650,000   |
| 2012年度 | 600,000   | 180,000 | 680,000   |
| 年度     |           |         |           |
| 年度     |           |         |           |
| 総計     | 2,100,000 | 630,000 | 2,730,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学、日本史

キーワード：中世史、対外交流、トウボウ、唐人町

## 1. 研究開始当初の背景

九州の北～西の海岸部と中国地方の西部日本海側には、「外国人居留地」の存在を示唆する地名がのこっている（あるいは歴史的

に存在した）。トウボウ（表記は、唐坊・唐房・唐防・東坊・東方・当方など）と唐人町である。

前者については従来、日本古代・中世最大

の国際貿易港＝博多の唐坊が有名であったが、近年、10数カ所の存在が確認されている。その中には、11世紀後半から13世紀後半に、中国宋時代の経済発展により渡来した宋人によって形成された居留地が含まれていると考えられる。

後者は16世紀末から17世紀初めの「外国人居留地」で、中国明時代の経済発展、明清交代にともなう政治変動、および豊臣秀吉の朝鮮侵略、日本の戦国大名・近世初期政権の重商主義的政策を背景として形成されたと考えられる。

一方、同時代の琉球や東南アジアの港市にも、主として「中国人」による居留地が多数見られた。

同時代に、同じ文化的・経済的背景をもった人々が「外国」に移り住み、形成した居留地のあり方を比較検討すれば、アジア規模での共通項を抽出できるはずである。一方、差異に着目することで地域ごとの個性を浮かび上がらせることもできるにちがいない。このような見通しから本研究を計画するにいたった。

## 2. 研究の目的

トウボウ・唐人町と琉球・東南アジアの「外国人居留地」の比較検討を通じて、中世日本の地域編成のあり方、対外交流のあり方について新たな見方を提示する。

## 3. 研究の方法

(1) トウボウ、唐人町という地名をのこす地域の、現地調査に基づいた歴史学的・歴史地理学的研究によって、その特徴—とくに空間構成のあり方—を把握する。

(2) 同時期の琉球や東南アジアの「外国人居留地」についても現地調査と資料収集を行う。

(3) 以上をもとに、日本と琉球・東南アジアの「外国人居留地」の比較検討を行う。

## 4. 研究成果

(1) 現時点での対外関係史研究を総括し、今後の展望を示す企画出版物において、トウボウと唐人町をめぐる研究状況の整理と問題点の指摘を行った（雑誌論文③）。議論の整理と学界に対する問題提起としての役割を果たした。

(2) 学術論文集（図書①）を公刊した。この論文集は、4部主要10章からなり、中世の鹿児島県万之瀬川下流地域の研究を核として、考察を九州、日本全体、東アジアへとひろげたものである。

主な論点は以下のとおり。

① 中世前期万之瀬川下流地域の様相の歴史地理学的方法による復原。

② 中世前期万之瀬川下流地域で展開された交易の解明、同地域に対する領主さらには国

家の関与の解明。

③ 万之瀬川下流地域を一方の極とする中世前期の九州さらには全国的規模の交通・流通体系の解明。

④ トウボウ・唐人町を鍵概念とする、地域の視座からの中国を中心とする東アジアと九州との交流の解明。

⑤ 中世日本国の東と西の周縁部であった東北地方と南九州との比較研究。

この論文集には、本研究遂行者が以前より行っている研究の成果も含まれているが、本研究によって実施した現地調査・文献調査等の成果も反映させている。主には次の二つである。

① 鹿児島県南さつま市のトウボウ遺称地（現在は当房、歴史的には唐坊）周辺について、新たな現地調査をもとに歴史地理学的考察を行った。その際のポイントは、万之瀬川の旧河口部の復原であり、現況調査と航空写真、地籍図等とのつきあわせにより、従来以上に正確な景観復元を行うことができた。

当該地のトウボウは、万之瀬川旧河口に隣接しており、また、港も近くにあったと推定される。この研究により「外国人居留地」を含む地域、中世港町の空間構成の解明に貢献できた。

② 通説では古代から中世における南九州随一（あるいは唯一）の国際貿易港とされ、唐人町も存在した坊津（現南さつま市坊津町）について江戸時代にまでさかのぼって史学史的検討を行った（雑誌論文②の大幅増補版）。

具体的には江戸時代の薩摩藩撰地誌、藩外からの旅行者の紀行文、薩摩藩記録所奉行の研究、明治～昭和戦前期の研究と地元で出版された教育・観光関係の書籍を対象とした。

その結果、古代～中世前期については、確固たる根拠がないにもかかわらず坊津に対して前述のような評価があたえられてきたことが明らかとなった。また、通説の起源は18世紀の薩摩藩記録所周辺の認識にあり、近代においては1902年に発表された藤田明（当時、第七高等学校造士館教員）の説が端緒となり、それが対外関係史研究の権威となった森克己の学説に受け継がれ、通説化したことも判明した。

坊津＝古代・中世全期間を通じた南九州随一の国際貿易港という通説は高校の歴史教科書にも採用されているもので、歴史教育の世界に影響を与えている。それを根本的に批判したことは大きな意味をもつ。ただし、この研究は坊津の学術的価値を低下させようという意図より出るものではなく、実態に基づく坊津像を探求する上での前提を作ることが目的であった。なお、坊津（正確には久志）に存在した唐人町は、戦国時代以降の産物であり、中世前期坊津の評価とは直結しな

い。

この論文集に対しては、現在までのところ、中村翼氏(『日本歴史』765号、2012年)と村井章介氏(『歴史』119号、同)に書評の労を執っていただいている。

(3)本研究においては周縁的テーマとなるが、次の二つの成果を得た。

①日本中世国家の周縁部(東北地方、佐渡、土佐、熊野、対馬、南九州)における支配者の行動パターンを、境界とその外側の世界との関係から考察する論文を発表した(雑誌論文①)。その結果、12世紀の境界権力・境界領主が政治的な圧力を加えられた場合に、「国境」をまたいで行動することを浮き彫りにすることができた。また、南の周縁部(土佐・熊野)のみはその例外であることも指摘した。

②国家周縁部の支配者の正統性を支えた論理について考察し、口頭発表を行った(学会発表①③④)。主要な対象は室町時代の南九州と東北地方で記された歴史叙述『山田聖栄自記』と『奥州余目記録』である。検討の結果、中央政権から支配を委任されたという論理と、在来勢力以来の伝統の継承者であるという論理のふたつが同等の意味をもって支配の正統性を支えていたことが明らかとなった。南九州と東北地方は、鎌倉幕府の成立によって、在来勢力が淘汰され、新たな支配者が乗り込んできた地域であり、右の二つの論理がきわだって顕在化したことも指摘した。加えて、東北地方に関する情報が『山田聖栄自記』に多く含まれ、逆に『奥州余目記録』には九州の情報がほとんど含まれていないことに着目し、中世社会における東北の位置づけについて考察した。

(4)国内では次の場所の調査を行った(既述のものものをぞく)。

①中国地方のトウボウ遺称地

山口県阿武町東方  
同長門市三隅東方

②南九州の旧唐人町

宮崎県都城市  
鹿児島県霧島市国分

③琉球の明人居留地

旧琉球王国久米村(沖縄県那覇市)

現況の確認とともに、地籍図、古地図、研究文献、考古学的情報の収集を行った。これらの調査成果の一端は口頭で発表した(学会発表②)。

(5)国外では、次の場所の調査を行った。

①インドネシア共和国バンテン州セラン市バンテン

②同ジャカルタ市コタ地区

とくに①はジャワ島西部において13世紀～14世紀、15世紀～19世紀に栄えた港市国家バンテン王国の故地である(前者がバンテン・ギラン、後者がバンテン・ラーマに対応)。

バンテン・ラーマについてはジャワ海に注ぐバンテン川河口部左岸に旧「中国人居留地」があり、付近には港もあった。「中国人居留地」が王宮からは距離をとって存在しているという特徴もある。このような空間構成は、琉球王国の久米村、(王宮を領主居館といれかえれば)日本のトウボウ所在地とあい通ずるものであり、東南アジアの港市の空間構成と日本中世の「外国人居留地」を含む地域のそれとが共通性をもっているという見通しをえることができた。このほか日本にも将来された媽祖像の存する中国寺院、市場跡、墓地、陶磁器を中心とする出土遺物などの調査を行い、多くの知見と情報を得ることができた。

「外国人居留地」が存在する地域のアジア規模での比較検討という課題については、インドネシア調査の実施時期が最終年度の12月であったということもあり成果発表にはいたっていない。しかし、今後、研究を進展させるための基礎データを数多く収集することができた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

- ① 柳原敏昭、境界への逃亡、竹田和夫編 古代中世の境界意識と文化交流、勉誠出版、2011、査読無、265-268
- ② 柳原敏昭、中世対外関係史研究のなかの坊津、森克己著作集4月報、勉誠出版、2010、査読無、9-15
- ③ 柳原敏昭、唐坊と唐人町、荒野泰典・村井章介・石井正敏編 日本の対外関係4倭寇と「日本国王」、吉川弘文館、2010、査読無、204-214

[学会発表](計4件)

- ① 柳原敏昭、黒嶋敏氏報告へのコメント、史学会大会日本史部会(中世)シンポジウム「中世史学の未来像を求めて」、2012年11月11日、東京大学大学院文学研究科(東京都)
- ② 柳原敏昭、益田の港湾遺跡と清盛の時代の交易、歴史を活かしたまちづくり講演会パート14、2012年9月23日、島根県芸術文化センター(島根県益田市)
- ③ 柳原敏昭、『山田聖栄自記』と『奥州余目記録』、隼人文化研究会例会、2012年5月19日、鹿児島県歴史資料センター黎明館(鹿児島市)
- ④ 柳原敏昭、中世日本国周縁部の正統観念、地中海学会、2010年6月20日、東北大学川内北キャンパス(仙台市)

〔図書〕（計1件）

- ① 柳原敏昭、吉川弘文館、中世日本の周縁  
と東アジア、2011、1-346

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.honey.ne.jp/~szell>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

柳原 敏昭 (YANAGIHARA TOSHIAKI)

東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：30230270

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：